

# 鷲巢/閻魔の聖杯戦争

Fabulous

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

1990年代の冬木の地にて行われる聖杯戦争

そこに現れたどん底人生からの一発逆転を夢見る青年、ウェイバー

彼の前に現れたのは昭和の妖怪と恐れられた怪物、鷲巢巖

今、二人の戦いが始まる――

# 目次

鷺巢降誕	1
鷺巢契約	19
鷺巢埠頭	35
鷺巢周辺	59



# 鷺巣降誕

努力は報われる……僕はそう信じていた……

ウエイバー・ベルベツトは最悪だった。自身の全てを注ぎ込んだ血と汗と涙の結晶である論文を講師に散々にこき下ろされ魔術師としても人間としてもプライドをズタズタにされたからだ。そこに正当性など無く、講師の言い分は明らかに不当……到底納得などできなかった。

（おかしい……こんなのは間違ってる。血筋や血統ですべてが決まるなんて…僕を嘲笑した講師や学生達こそ間違っているはずなんだ……っ）

そんな思いを胸に今日までひたすら論文を作成し天才である時計塔講師にその論文を提出し評価してほしかった。しかし結果は無残……あまりに無念だった。情熱を燃やし続けてきたウエイバーだったが今その炎は燃え尽きようとしていた。最早通常の手段では自分は認められない。ウエイバーは願うことしかできなかった。全てをひっくり返すほどの変化が起こることを。

そんな時耳にしたのが聖杯戦争だった。極東の地にて行われる魔術師同士の殺し合いにあのケイネスが参加するという噂。それだけならばたいした興味を引かなかった。ウェイバーは自分の魔術師としての技量は十分心得ていたし自分の力ではどう知略を巡らしても勝ち目はない、正当な評価を得たいという強い渴望は有ったが勝ち目のない無謀な賭けに出るほどウェイバーは愚かでもなかった。

「サーヴァント……」

殆どドン詰まりの現状に舞い降りた価値千金の情報。聖杯戦争はただの魔術師同士の殺し合いではなかった。サーヴァントと呼ばれる過去・未来・現在に人類史に名を刻んだ英霊達を使い魔として使役し万能の願望器である聖杯を奪い合うのが聖杯戦争だと知ったときウェイバーは歓喜した。

（これなら戦える！）

自分の魔術師としての力は底が知れるがサーヴァントのような超常の存在が自分の力となるなら戦いようはいくらでもある。これだ、これしか自分が這い上がる道はな

い。少なくともウェイバーはそう信じた。しかも今回の聖杯戦争には壇上にて自分を嫌と言うほど嘲つた時計塔随一の実力者であり天才、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが参戦するのだ。家柄・血統・才能・権力・実力、ウェイバーの遥か高みに君臨する存在だ。純粹に魔術師として戦えば正々堂々だろうが不意をつこうがまず殺される。だが今回は戦争だ。聖杯戦争は全部で7組のサーヴァントとマスターが集う。当然全員入り乱れての乱戦が予想される。そこにサーヴァントという強力な武器を効果的に使えば自分にも十分勝機はある。何よりあのいけすかないしたり顔を敗北の苦渋で歪ませられる、あのととき散々バカにした落ちこぼれの手によつて。

「聖杯戦争……これに勝てば僕は……」

暗い未来しか見えなかったウェイバーの人生に一筋の光明が見えた気がした。

しかしウェイバーは早くも壁にぶつかる。サーヴァントを召喚する儀式である。言うまでもなくサーヴァントの存在は今回ウェイバーが聖杯戦争に参加した決め手だ。しかし人間を超越した存在をそう簡単には召喚することはできない。冬木における聖杯戦争の英霊召喚はその大部分の魔力を聖杯がバックアップすることによって一人であるマスターがサーヴァントを使役できる。これならば魔力に劣るウェイバーでもケイネスのような一流の魔術師達に対抗できる要素だ。しかし次に重要なのは肝心要

の英霊の選択。人類史に名を刻んだ英霊達とは言えその強さやタイプはまさに千差万別、一騎当千の勇将や権謀術数の策士、果ては怪物や半神のような存在など多くの人々・世界に善くも悪くも影響を与え続ける英霊達の中にも当然、弱点が存在する。煌びやかな栄光を放つ英霊達も最期は以外に呆気ないことが多い。ケルト神話のクー・フーリンは最強の戦士であったが多くの不運や女王メイヴの策略によって潰えた。ギリシャ神話のヘラクレスも数々の試練を潜り抜けたが最期は神の策略によって命を落とした。自国の英雄、アーサー王もまた聖剣を携え国に平和と繁栄をもたらしたが不義の息子によってその全てを失った。

運悪く、召喚したサーヴァントの弱点をつける武器や能力を敵のサーヴァントが保有していたらその時点で優劣がついてしまう。戦争に勝利するためにはそんな事態は避けたかった。それに敵もバカではない。どんなに強くても致命的な弱点を持つ英霊では一度や二度戦えてもいずれ分析されこちらの弱点をつこうとしてくる。そうなれば戦争を勝ち抜くことはできない。だからこそ英霊召喚の際に強力で弱点の少ない英霊縁の触媒が必要だった。触媒無しでの召喚も出来なくはないがそうなれば完全な博打、そんな運否天賦で命は賭けたくない。それがウェイバーの正直な思いだった。

だがしかし、結果としてウェイバーは触媒を入手できなかった。時計塔の管理する物で触媒になれそうなものをも思ったが、ウェイバーのような若輩に時計塔が貴重な研



究品を貸してくれるはずもなくあえなくおじやん。盗むという手段もあつたが自分では警備を突破することはできないと判断しこれもダメ。仕方なく資料をあさりなにか手掛かりはないかと探すがそんな都合の良いことがそうそう起こるはずもなかった。だがしかし、そんなウエイバーにまさかのチャンスが到来した。

切つ掛けは全くの偶然であつた。

なんとウエイバーの手の中に触媒があるではないか。それも彼のアレキサンダー大王縁の品だ。ケイネス宛の小包をひよんなことから受け取り中を調べてみるやそれが喉から手が出るほど欲しかった聖遺物だったのだ。

この奇跡とも言えるチャンス到来にウエイバーは迷った。聖遺物をケイネスに渡すか、それとも自分が……

(どうする?これはチャンスだ!紛れもない決断の時だつ!)

ウエイバーは自分が人生の岐路に立っていること、同時にウエイバーは自分が震えていることに気づいた。

(どうした!?!チャンスだろ!この聖遺物を持って日本に行くんだ!)

必死に自分を鼓舞するウエイバー。だが思いとは裏腹に震えは益々大きくなっていく。

(……)の聖遺物を盗めば確実にケイネスに知られる。そうなればあの高慢な男は決して下手人を許さないだろう。今は盗まれたことだけしか分からないだろうけど調べれば僕が盗んだことはいずれわかってしまう。彼は僕をどうするだろうか？ 時計塔講師としての権力で僕を裁くのだろうか？ いやひよっとしたら命の危険もあるかもしれない……第一盗んだところで僕は本当にサーヴァント召喚ができるのか……?)

既に当初の高揚感は消え失せ、冷静に考えれば考えるほど自らの悲惨な末路が頭をよぎった。

(でも、だ。万が一、聖杯戦争に勝てば僕はあの天才ケイネスや御三家より優秀だつてことをこれ以上ないほどの舞台上で示せる。今までの僕に対する不当な評価は逆転するはずだ……)

得るものはリスクと等価交換

(でも負ければそれでお仕舞いだ。聖杯を求めて殺し合いをする魔術師達がサーヴァントより未熟な魔術師である僕を狙おうと考えない筈がない。それこそケイネスに命乞いなんて絶対に通用しないだろう。運よく生き残っても五体満足とは限らないし時計

塔に聖遺物を盗んでケイネスを貶めた僕の居場所があるとも思えない……

ウエイバーは恐れた。リスクを、敗北を、死を。

結果は当然……ウエイバーは聖遺物をケイネスに届けた。ウエイバーはチャンスを捨ててしまった。自ら。

帰り道。足取りは重く胸中は負の感情に満ちていた。

(そもそも馬鹿げてたんだ。正当な評価を得るために殺し合いをするなんて。こんなところで無理はできない。僕にはまだまだ可能性があるんだ。時計塔でじつくりと頑張ればいい……)

敗北感・惰性・諦観・無気力・怯え・羞恥……入り混じった多くの言い訳で埋もれながらウエイバーは一人、泣いた……

しかし現在に戻り場所は日本、冬木市

ウエイバーは宛もなく町をさまよっていた。

(我ながらどうかしている……触媒も用意できず挙げ句折角のチャンスを捨てたつての

にどうして僕は此処にいるんだろう。)

そう、ウェイバーは諦めていなかった。いや正確には今現在も踏切りがついていなかった。あの後、ケイネスに荷物を届け、ウェイバーは後悔した。聖遺物を手にした瞬間変われる気がした。周りに蔑まれる自分から皆に称賛される自分を、人生最高の瞬間を想像することが出来た。もう少しでそれは夢ではなくなっていたかも知れなかった。だが手放した。他でもない自分が。その事を責める自分と擁護する自分にウェイバーは押し潰されそうになっていた。そして後悔の波にとうとう堪えきれず、この冬木の地を踏んだ。

(女々しすぎる……これじゃバカみたいだ……)

自分のあまりの情けなさに目を潤ませながらもウェイバーはこの地で自分の人生について考えようとしていた。

ウェイバーは魔術による催眠で現地に住むマッケンジー夫妻を暗示によって説得し彼らの家を当面の自分探しの拠点とした。マッケンジー夫妻を巻き込むことに罪の意識を感じたがどうしてもこの地で答えを得たかった。

しかしそう簡単には自分は見つからない。答えを得られず時間ばかり消費し続けることにウェイバーは辟易していた。

（このままイギリスに帰るのか？　また元のうだつの上がない毎日に……）

そんなときに彼は現れた。

ウェイバーがマツケンジー夫妻宅に帰る夜道の帰路、なにやらただならぬ声が聞こえた。

「な……なんだ？　喧嘩か？」

声のする方向を向けば道の先に数人の男達が一人の白髪の男を取り囲んでいた。彼らの手には角材や鉄パイプなど十分に人を殺傷することができる凶器が握られていた。取り囲む男達の中の一人が白髪の男に詰め寄る。

「テメーがイカサマで騙し取った俺達の金！　きつちり落とし前つけてから返してもらおうぜー！」

言われた白髪の男は飄々と言い返す

「おいおい……俺はイカサマなんか使ってないさ、逆にそっちが使ってた通しやぎりを見逃してやったんだぜ……」

そんな男の挑発ともとれる発言に遂に均衡が破られる。

「ふざけやがって！」

「ボコボコにしてやるぜ！ おっさん！」

「お……おい！」

ウエイバーが咄嗟に声を出した瞬間、襲い掛かった男の一人が鈍い悲鳴を上げて地面に倒れた。ウエイバーも他の男たちも何が起こったかわからない間に白髪の男が瞬時に数や武器をもつともせず次々に暴漢たちを倒していった。

「残るはお前ひとりだな……」

白髪の男が最後に残った既に戦意喪失している暴漢語り掛けた。

「ひいつー！ い……命だけは……！」

「こいつらを片付けておけ……道の邪魔だ……」

男は興味が無くなったかのように吐き捨てて眼前で起こったアクション劇に半ば呆然としていたウエイバーの方に向かって歩き出した。

「坊主……今の見ちまったな」

男が自分に向かって語り掛けた

「え!?!……いや……あの……」

「口封じだ……付き合え」

まさかの発言に意味が分からないと思つているうちに首根っこをつかまれウェイバーは男につれられる

「うえつ!?!ちよ……ちよつとくく!?!」

(僕は何しに日本まで来たんだっけ?)

あのあと、白髪の中年男はウェイバーを町の繁華街のとある飲食店に半ば強引に連れ込んだ。未だ何がなにやらわからぬウェイバーをよそに彼は席につき既に注文を始めている。さすがにもともとと機嫌がいいとは言えないウェイバーはどうとう我慢の限界を迎える。

「それで! 僕をこんなところに拉致して一体なにをするつもりなんだ!」

しかし中年男はおもむろにタバコを取りだし口にくわえ火を探しているのか着ていた衣服を探りだした。

(無理やり連れ出したくせに今は僕のことよりタバコの方がこの中年男にとっては優先度が高いなんて……)

ようやくライターを見つけた中年男はくわえタバコに火をつけ、ようやくウェイバーの方を向き口を開いた。

「だから口封じだったって。旨いもん喰わせてやるからさつき見たことは忘れな……」  
「はぁー……?」

ウエイバー混乱

この中年男いわく口封じだそうだ。

この中年男はあの現場を目撃したウエイバーが警察に通報しないように口止めとして晩飯をおごるといふ。

(この中年男はまともじゃない。あの騒ぎ、経緯はわからないが一人を多数で取り囲み武器まで持ち出した彼らの方が圧倒的に非がある。この中年男も暴力を振るったがしっかりと調べれば正当防衛なのは明らかで普通は一緒に警察に訳を説明してくださいと頼むとかそれこそとつと逃げ出せばいいのにこれがジャパニーズ O M O T E N A S I I なのか?)

ウエイバーがそんなことに考えを巡らしていると料理が運ばれてきた。

「さ、来たぞ喰え喰え」

見たところ大皿に均等に敷かれた魚の刺身? のようだがなんの刺身なのかウエイ

バーにはまるでわからない。



「あの、これなんの刺身ですか？」

ウェイバーが配膳係に聴き、配膳係は満面の接客スマイルで、河豚でございませと答えたと

「へーこれがフグなんですか…ふ…河豚!？」

ウェイバーは驚愕した。河豚といえば猛毒のテトロドトキシンを保有する危険な魚で有名だ。

(……殺される……っ！)

ウェイバーは恐怖した。

(おごるだのなんだのいってこの中年男は僕を口封じで殺すきなんだ！ どうする!? 魔術で暗示をかけて逃げ出すか？ だが店内には他にも客や従業員がいるから万一暗示をかけるところを見られたら…)

そんなウェイバーの考えを知ってか知らずか中年男はなんの躊躇もなく河豚を自分の口に運び、

「まあまあだな……」と一言

そしてまだウェイバーが手を付けていないことを確認すると

「あ？ どうした？ 遠慮せずに喰ってみろよ」

「そっそれ！ 河豚!! ど……毒が」

それを聴き間を置いて中年男が吹き出す

「クククツなるほど。すまなかつたな。そういやお前日本人じゃなさそーだもんな」

河豚の安全と味を教えてもらったウエイバーは中年男と別れマツケンジー夫妻宅に帰宅しなかった。遅くなつて心配させていることを心の中で謝罪し森へ入る。

ウエイバーは決意した。どんなにか細くてもチャンスに賭けることを

「死ねば助かる……か」

ウエイバーの手の甲には礼呪が、そして手の中には透明なガラスの麻雀牌が握られていた。

ウエイバーはサーヴァント召喚の儀式に必要な魔方陣を描いていた。勝手に拝借した生け贄の血と己の血で。

たいした意味はない。謂わばこれはウエイバーなりの決意表明のようなものだった。行くところまで行く――

ウエイバー自身が選んだその証明として……

（そもそも無事サーヴァントを召喚できる保証などない。触媒もなく魔術師としても未熟な僕が魔法クラスの英霊召喚を成功させておまけにケイネスや御三家と戦争して勝とうだなんて……どう考えても正気じゃない。だけど……）

「そんなの初めから解ってるさ！でも僕はこのチャンスに賭けるしかないんだ！」  
詠唱を唱える。

ウエイバーは自身の魔術回路の軋身を感じたが構わず唱え続ける。

「頼む！ 二流でも三流でも僕に力を貸してくれるなら悪魔でも化け物でもなんだっていい！ チャンスをくれええええ！」

ウエイバーの魔術回路が悲鳴をあげる。

（どうだっていい！ 覚悟はしたんだ！）

瞬間、魔方陣が輝き光に包まれる。

急激な魔力の消費によって意識が飛びかけたウエイバーは果たして召喚が成功したのかまだ分からなかった。

（頼む、成功してくれ）

もはや祈るしかなかった。

「カッカカッカ、わしを呼び出すとは随分無礼じゃの。だがわしがおればこの戦争は負

ける道理などない……お主運が良いな……!」

(成功したっ!)

サーヴァントとパスが繋がったことを全身の魔術回路が何より目の前のただならぬ存在感を放つ老人がそれをウェイバーに教える。召喚による疲労も忘れウェイバーは歓喜していた。

(やった! 成功した! 最初の賭けに勝ったぞ、僕は!)

そんな喜びにただ突っ立っているだけのウェイバーに怒声が掛けられる。

「おい! いつまでそこでぼんやりしとるんじゃ貴様! わしのマスターなんじやろ!?!」

「うええ!? いやっあの……は、はいっ!」

いきなりの叱咤に早速縮み上がるウェイバー。無理もない。相手は人智を越えた存在。本来ならウェイバーが話しかけることもできないほど両者の隔たりは深い。

その事を理解しウェイバーひとまず喜びに蓋をする。

(危ない危ない僕としたことが、これはまだ始まりに過ぎない。自分は漸く聖杯戦争における英霊召喚というスタートラインに立てただけなんだ。)

そう、ウェイバーを悩まし続けたこの英霊召喚は、本来なら戦争のための当然の準備であり、今頃は他のどの陣営もマスターとサーヴァントが戦略や信頼関係を築く時間に当てているはずだからだ。特にケイネスならば作戦やサーヴァントなど万全の布陣を敷いてるに違いない。間違いなく自分は今回の聖杯戦争で一番出遅れているはずだとウェイバーは冷静に分析した。

(浮かれている暇はないっ……このサーヴァントの言う通り早く真名とステータスの確認や今後の方針とか色々やらなきゃならないことが沢山あるじゃないか！)

「わ、わかった。おまえの言う通りだ。僕いや私はお前のマスター、名をウェイバー・ベルベットだ。さっそくだがお前の真名とステータスを……」

「……れがつ……」

「えっ？」

「誰がお前だ！ こいつめっ！」

そう目の前のサーヴァントが言い放ちウェイバーの頬に強烈な平手打ちを食らわせる。

「ふっふっ！」

見た目が老人とはいえそこはサーヴァント。ウェイバーは情けない声を上げ数メートル回転しながら吹っ飛んだ。

「全くっ……！ 近頃の若者は全くもって礼儀がなつとらん！ 目上の者に対する敬意が欠けておる！ これだからガキは嫌いなんじや！ おい！ いつまで転がっておる！ 早く起きてわしに状況を説明せい！」

召喚による疲労とこれまでの心労からの解放によつて既にギリギリだったウェイバーの心身に今の止めの一撃をくらい彼の意識は消失した。

「おい！ 小僧！ 目を覚ませ！ コラッ起きろ！ わしをこんなところにほっとくな！ 起きろ！ 起きるんじやあああ！」

## 鷲巢契約

ウエイバーは瓦礫の山に立っていた。辺りには焦げ臭く嫌な臭いが漂い周りを見渡せば瓦礫はここだけではなく遠く彼方まで至るところで山となり、所々で火災のような煙も上がっていた。

(ここはどこだ？ 僕はどうしてここに……)

ウエイバーは誰か人はいないか声を上げたが返ってくるのは乾いた風の音のみだった。目の前の崩れかけたビルの上には焼け焦げ煤けた日本国旗が力なくたなびいている。

(ここは日本なのか？ だけどこんなまるで中東かどこかの扮装地帯のような場所が現代の日本にあるわけがない。それこそ大昔の世界大戦でもない限りは……)

大きな風が吹いた。国旗は吹き飛びビルは嫌な悲鳴を上げ軋みコンクリートが節々に崩れ落ちてきた。不安になりとにかくここから離れるため足を踏み出した時になにかに躓き転んでしまう。瓦礫かなにかと思つたがそれにしては嫌に弾力があつた。見ればそれは黒く焼け焦げた人のような物体だった。

「うっ……うわっ！」

悲鳴を上げてウエイバーは慌てて飛び退く。だが飛びのいた先にも死体がありウエイバーは吐き気を感じた。よく見れば周りは様々な死体が山ほど転がっていたのだ。焼け爛れた死体、欠損した死体、ガリガリに痩せ細った死体、それらの死体は老若男女問わず瓦礫と同じくらいゴロゴロと散乱している。そしてそれらにカラスやネズミや虫達が群がり食い荒らしている。そこに死者の尊厳など無くただひたすら残酷に自然の摂理が罷り通っている。ウエイバーは自分が地獄にいるのではないのかと思った。耐えきれずパニックになりその場から走り出すがどこまでいっても瓦礫と死体の山が積み上げられていた。辛うじて女性と分かる死体や子供の死体が目に入り、ウエイバーはもうこれ以上この狂気の世界を直視できず天を見上げた。

空は青く美しかった。



「うわああ！」

悪夢から覚めたウエイバーは勢いよく跳ね起きた。

（なんだったんだ今の夢は……夢にしてはやけにリアルだったけど……）

「やっと起きたか小僧。」

ウエイバーが振り向くとそこにはかなり不機嫌そうな顔をした老人が立っていた。ウエイバーはそこで自分が気絶する前のことを、目の前の老人がその原因だということも思い出した。

「な!?! お前! さっきはよくも僕を打つたなあ!」

「知るか! 礼儀のなつとらん貴様が悪いわ」

ウエイバーは頭を抱えた。

（最悪だ……この傍若無人な老人が僕のサーヴァントなんて……いくら令呪あるとはい

え本当にやっていけるのか？ いや、慌てるな。まずは状況整理だ)

「え、えーと。さっきの非礼は謝るよ。改めて僕の名前は……」

「それは先ほど聞いた。次」

ウエイバーは驚いた。こんな滅茶苦茶な振舞いっぷりなのに聴くところは聴いているのかと。

「な、ならひとまず契約をしよう。サーヴァントとマスターの……」

そう提案すると老人は心底嫌そうに顔を歪めた。

「ふん！ いいか小僧。確かに貴様はわしのマスターだがくれぐれも勘違いするなよ。お主がわしの上に立つことはない。今も昔もこれからもだ!!」

ウエイバーは返答に困った。つまり老人はマスターとサーヴァントの関係は認めるがウエイバーに従う気はないと言っているのだ。

(どうする。令呪を使うか？ いやいや、貴重な令呪だ。それは短絡的すぎる考えだ)

「わかった。おま……貴方の意思は尊重するよ」

「まあよい。ところで小僧。いくつか聞きたいことがある」

そこで老人はウエイバーに今は西暦何年なのか、ここはどこなのかを聴いた。

「なるほど。あれからそんなに時間はたつとらんのか……ならあやつもどこかに……」

ウェイバーはただ黙って見ていることしかできない。そもそもこの老人は誰なのか？ 身に付けている衣服は西洋風の洋服であり素人目にも高級品だと分かる。恐らくそれなりの身分と財力を持つていたと推測できる。見た目は老人だが全身から大物然としたオーラを放ちまるでマフィア映画や日本のサムライムービーに登場する悪の黒幕のような印象だ。明らかにマツケンジュー夫妻のような老人とは掛け離れている。

「おい小僧。そう言えばお主の望みはなんじゃ？」

「小僧小僧言うな！」

「あ？」

「あ、いや、言わないで下さい……」

既に上下関係が逆転した状況で老人から問われたならば答えなければならぬ。

「ぼ、僕の望みはこの聖杯戦争を勝ち抜くことだ。そして僕を馬鹿にした奴等を見返して最悪な人生を逆転させる。」

（そう、これが僕の決意。例え殺されてもやり抜くと決めたこと。後戻りは出来ない）

「それだけ？ それだけなの?？」

老人は拍子抜けしたように呟き、ウェイバーに語気を荒げて語る。

「もつとあるじゃろ！ この戦争がそう何度もない機会なのはお主もわかっておるじゃろ！ 恐らく貴様の人生で一回か二回有るか無いかの大チャンス！ しかもせっかく

このわしを喚んでもう勝利確定のこの布陣で望む願いが馬鹿共にチャホヤされたいだけなのか!」

「い、良いじゃないか! どうせ貴方に僕の気持ちなんて分かるわけないだろうけど、僕にとつては命懸けなんだよ!!」

「カツ! 小さい小さい小さい!! まあわしを喚んだのだ。クズではないのは確かじゃが、それにしちや随分矮小な望みじやのう。世界征服ぐらい望んでもバチは当たらんぞつ」

「そんなの望んでないよ。僕はただ……」

「あゝいいいい、凡人はすぐ当たり前のことをいう。それだからいつまでたつても変わらないのだ。」

「うっ……」

老人の言葉は無茶苦茶だがウエイバーの胸に突き刺さる。凡人と言われたことを否定したかったがウエイバーにそれを否定するだけのものがないことが悔しかった。

「だ、だからを貴方を召還したんだ! 僕は勝つて証明したいんだ!」

ウエイバーは自分が情けなかった。この老人がどんなサーヴァントなのかは分からないがウエイバーより優れた存在なのは嫌でも分かる。ウエイバーは思う、老人は想像も及ばない壮絶な人生を歩んだから英霊として存在しているのだろう。彼にしてみれば

ばウエイバーの願いなんで取るに足りない小さなことのはずだ。

「勝つ？ そりゃその通りじゃ。勝って初めて己の優位が決まる」

ウエイバーは意外だった。まさかこの老人がウエイバーに対して肯定的な意見を言うとは思っていなかった。ウエイバーはつきりこの老人は人を人とも思わない独裁者のような英霊だと思っていたが案外まともかもしれないと認識を改めた。

「さて、まずは暫くの間のねぐらじゃ。おい小僧、貴様わしを迎える準備はしているだろうな？」

「え？ いやあの……」

ウエイバーは正直困った。この冬木での拠点は確保しているがあくまで暗示を駆使した居候であり戦争をする為の拠点ではない。それに暗示も未熟でボロが出ては暗示を掛け直している現状だ。そこにこの異様な老人が現れたらどう取り繕えばいいやらいいのか分からない。

そのことを伝えると……

「わしに霊体化してコソコソ隠れろと言いたいのか……！」

案の定な返答だった

「仕方ないんだ。僕が居候している家にはこの戦争とは関係のない人達が住んでいるんだ。あの人達をこれ以上巻き込めない……っ」

「知るか！ そんなこと！ わしは行くぞ。逃げも隠れもせずに堂々と正面玄関から家主に了解を取って見せる!!」

「えええ!?!ちよつと待てよ〜!」

それから二人は強引にマッケンジー夫妻宅に連れられ玄関から帰宅した。もちろん霊体化もせず老人はマッケンジー夫妻と対面しウェイバーはもう一度暗示をかけ直さなければと覚悟したが驚いたことに老人は言葉巧みに夫妻と打ち解け暫くここに住まわせてもらうことを了解させた。

「どうやったんだ?」

部屋に上がるとウェイバーは老人に夫妻の説得方法を聞いた。マッケンジー夫妻は良い人達だが馬鹿ではない。

「話をただけじゃ。これくらいの交渉も満足に出来なければ王にはなれんぞ。わしはあやつらとここにいる間同年代の気の合うお話し相手に成ったのだ。くだらん」

と、何だか分かるようで分からない答えが返ってきた。

そしてウェイバーは今更ながら老人の真名もステータスの確認もしていないことに気付いた。

「あの、そろそろ貴方の真名とかクラスを教えて欲しいんだけど……」

「真名？ クラス？ ああそういえばそんな決まり事があったな……そも名を隠し合うなどくだらんわ！盗人でもあるまいし、このバーサーカー、鷲巢巖の名を知られて困ることなどわしにあるかつ！」

（なるほど鷲巢巖か……鷲巢巖？ 全然聞いたことがない……）

「て、バーサーカー!?!」

「なんじゃ人を指差して無礼なやつめ、わしがバーサーカーで悪いか」

「いやだつてバーサーカーだろ！狂戦士！制御不能の暴力の英霊！」

「それがどうした。わしはバーサーカーだが鷲巢巖に変わりはない。それで十分じゃろ。」

ウエイバーはまたも頭を抱えた。

（バーサーカー。通りで無茶苦茶で暴力的で魔力の消費も激しい訳だ。名前からしてこの極東出自の英霊だが僕にはさっぱり覚えがない。日本の歴史に詳しくはないがこちらでは有名な英霊なのだろうか？）

気を取り直してウエイバーはステータスを恐る恐る確認する。

（頼む！ヘラクレスやクー・フリーンクラスなんてはなから望んでないけどせめて戦

えるステータスであってくれ……!)

鷺巣巖 混沌・悪 バーサーカー

「勝手に覗くな!」

「あべっ!?!」

突然ウエイバーはいつの間にか鷺巣が取り出した杖で脳天を叩かれた。

「おい小僧! 何度も言わせるな! わしに対する無礼は許さんぞっ!」

「う、うううなにも叩かなくなったっていいじゃないかあつ」

「か〜く〜! 甘い! 甘すぎる! だからお前は舐められるんだ!」

「それは関係ないだろ!」

「あ!?!」

「いえっ……あるかもです……」

(これじゃどつちがマスターでサーヴァントなのか分かったものじゃない……僕、マスターなの……)

ウエイバーはまたも、泣いた。

「男がメソメソ泣くな!」



死後の世界が在ろうが無かろうがわしにはどうでもよかつた。

わしはどこに行こうとも王だからだ。人間共の位などとつくの昔に頂点に立つておつた。神仏も魍魎魍魎の輩共も少し時間はかかったがわしの下に屈した。

王

わしが王なのだ。それこそが理なのだ。今までもこれからもずっとそうであるのだ。あの男に出会うまでは……………

人生最大の屈辱。あの屈辱は生涯忘れないっ!! 決してっ……………!!

英霊、聖杯……………知るかそんなもん。だがあやつとまた再戦が出来たら何でもよいつ

！ 彼の英霊どもなんぞ所詮馬鹿かツキに見放された運無しの輩共じゃ。ならわしが勝つしかないではないか。さあ！ わしの準備は出来ておる！ 早くわしを召喚しろ！ マスター共！

「……………」

「……………永いわっ！」

「おい！如何なっておる！ 全く呼ばれんぞっ！ いつまで待てばよいのじゃ！ わしじゃぞ！ この鷺巣巖がサー何とかになって力を貸してやろうというのになぜ誰もわしを呼ばんのだ！」

「ウぐぐぐぐつ…クソっ！だいたい…なんだこの世界は！ 座という物らしいが一面、瓦礫……！ 死体……！ 辛気臭すぎるわ！ 共生や！ わしの屋敷でよいじゃろう

「~~~~~！」

「岡本！ 山田！ 田中！ 酒井！ 鈴木~~~~！ 出てこい！ わしはここじゃ~~~~！」

しかし当然鷺巢は依然独り。生前彼に仕えた者達の姿は影も形もない。

「……だんだん……腹が立つてきた。そもそもなんでここでまたにやならんのだ。言うなれば座というのは選手の控室兼家じゃろう？ ならもつと待遇を良くすべきはずじゃ。屋敷や執事やワインやステーキやその他娯楽類当然完備すべきはずじゃ……っ！」

鷺巢は沸々と怒りが込み上げる。

「出てこい！ わしをこんなところに押し込めた不屈き者め！ 許さんぞ！」

しかし無情にも返ってくるのは風の音ばかり。返答も反応もなにもない。

鷺巢はもう我慢の限界だった。

「ぬう。いつ来るか分からんお呼びなどもう待つてられんわ！ こうなつたら自分から現世に行つてやる。」

どこかに出口は無いものかとあたりをキョロキョロと見渡す鷺巢。

「しかし閉じ込められたことは何度もあるがこんな閉じ込められ方は初めてじゃ……脱出方法が分から……なんじゃ？」

その時鷺巢は気づいた。誰かが何かを呼ぶ声に。

「なんじゃこの声は……？ わしを呼んでいるのか？」

声は更に大きくなる。鷺巢は体が声の方向に引かれる感覚を覚える。

「おおお！ 遂に来たか！ 召喚！ わしを召喚する者が現れたか……っ！！ まったく待たせおつてからに！ まあ良い、長いこと待ったがこれとは比べ物にならぬほどわしは待ったことがあるからの……！」

座から離れ、声の元に行く鷺巢。しかしここで思いもかけず鷺巢、ブレーキ。

「な、なんじゃ!? なぜ止まる？ どうゆうことじゃ……ん？」

見ると鷺巢の周りには鷺巢同様声の元に引かれる存在が無数にうごめいていたっ！！

悪霊、物の怪、亡霊、英霊、神霊までもその大小に関わらず声の元に我先にと集う鳥合の衆。

「おい！ 待てっ……そこに行くのはわしじゃ！ 散れ！ 有象無象共!!」

(冗談じゃない。ここまで来て折角舞い降りたチャンスを用意にできるか!!)

しかし亡霊達も負けずに鷺巢を蹴落とそうとする。彼らもチャンスを掴みたいのだ。

「お前らなんか死ぬ！ もう一回死ぬ！ わしの邪魔をするな！」

間隙を縫い亡霊の一体が先んじる。

(不味い！　このままではっ！)

鷲巢は駆ける……！声の元へと。誰よりも早く……誰をも押し退けて駆けずる……

遂に亡霊に追い付く鷲巢。そして……パンチ……ツツ！

「ヤメローシニタクナーイ！」

「退け!!」

鷲巢は亡霊を押し退け声の元にたどり着く。

「待っておれ！　わしが行く！　誰かは知らんがお前が召喚するのはこのわしじゃ……  
っ!!」

「大丈夫かこいつ？」

わしの目の前にはわしに吹っ飛ばされて気を失ったガキがのびておる。こんな明らかにひ弱くて人生舐めくさったガキがわしのマスターなど考えたくもない……ないが：仕方ない。

「ん？これは……」

わしは自分の立っている場所に描かれている魔方陣を見る。血じゃ。血で描かれておる。小僧の近くには鳥が死んでいる。不愉快だ……わしが鳥風情の血で召喚などど……

ふと小僧の方を見る。腕に真新しい手当てをした跡があった。

「ん？こいつまさか自分の血で……」

それを証明するように魔方陣の中央から小僧の魔力を強く感じた。

「ククククツ、なんじゃ、クズかと思っとったがこいつ中々狂っておる……」

前言撤回じゃ、見どころはある。ほんの少しじゃがな。

## 鷲巢埠頭

(アサシンが殺られた!?)

使い魔越しに見た光景にウェイバーは驚いた。聖杯戦争が開幕してまだ間もないというのに既に七騎の一角であるアサシンが金色のサーヴァントに文字通り瞬殺されたのだ。

マスター殺しを主とするアサシンが早々に敗退したのはウェイバーにとって喜ばしいことだがそれよりも金色のサーヴァントは正体についての方が気になっていた。あのサーヴァントの背後から射出された武器の正体も皆目見当がつかなかった。

「どうした小僧。何かあったのか?」

鷲巢が語り掛ける。

「今、使い魔からアサシンが殺られたのを確認したんだよ」

「それはなによりじゃ。労せずして邪魔者が減るのはこちらとしても好都合というものの」

「それはそうだけど……でもアサシンを倒したサーヴァントが異常なんだよ!」

「異常?」

「そのサーヴアクト……アサシンをあつという間に倒したんだ。ほんと……あつという間に」

「実力差があつたのではないか？ アサシンがよわつちいか倒した方が強かつたのじゃろう」

鷺巣の考えはある種の当たっていた。アサシンは他の六騎と比べればキャスターに続いてサーヴアクト同士の戦闘に向いていないとされる存在だ。アサシンがやられたこと事態はそれほど意外ではない。だがウェイバーが使い魔越しにみたあの金色のサーヴアクトは別。ウェイバーさ言い知れない不安を感じている。まるで触れてはならない存在だとウェイバーの体が警告しているように。

「でもそいつ、沢山の武器を使ってアサシンをあつという間に倒したんだぞ」

「それがどうした。持つてる武器が多いに越したことはないがそれだけ自信がないと言ふことじゃ。人間真に頼れるのは己の肉体じゃ」

（駄目だ……この老人は恐れるとか不安がるとか全く考えていない。本当に分かっているのかなあ？ これは戦争なんだけどなあ）

「さてそろそろ行くかの」

「へ？」

鷺巣は突如そう言い放ち立ち上がる。



「ま、待つてくれ。いったいどこに？」

ウエイバーが問えば驚巢は振り返り邪悪な笑みを浮かべて答える。

「決まつておろう……わしに弓引く不届き者共がどんな奴等なのか見物に行くのじゃ

……！」

「ええええ!!」

「カカカツ、サーヴァントの体は実に動きやすい。わしの若い頃並み、いやそれ以上じゃ  
！」

「バババ、バーサーカ、はしやがないでっ！ 落ちるっ落ちちやうつて！」

ウエイバーは驚巢に無理やり鉄橋の上に連れられている。

「お、やつとるわやつとるわ。あれが英霊か？ 見た目は優男と小娘ではないか」

「み、見えるのか？」

「おお、見えるぞ。劍の小娘が槍の優男に追い詰められとる。カカカツ、こりや勝負あり  
かの？」

「劍？ 槍？ てことはやられそうなのはセイバーか？ ならありがたい。最優のサー

ヴァントが脱落してくれたら僕らの勝率は高くなるはずだ」

「ククク、なんじゃあ？　どんな猛者が現れるか気になっていたがあの様子ではこの聖杯戦争も底が知れるの……む？　む？」

鷺巢は突如笑みを止めた。

「なんじゃあの空気の読めんデカブツは……！　おまけに臆病者じゃと？　この鷺巢殿に向かつて……!!」

「バーサーカー？」

ウェイバーは嫌な予感をじはした。だが鷺巢を止めることなど端から無理な話だった。

「カカカ、よかろう！　行くぞ小僧、手打ちにしてくれるー！」

「うえ!!　ちよ、ま、うわくく!!」

「新手か……」

埠頭は膠着状態になっていた。突如として乱入した自らをライダー、イスカandalと

公言する男によつてセイバーは様子見をするしかなかった。

「セイバー……」

マスターであるアイリスフィールが不安げにセイバーを呼ぶ。

「アイリスフィール落ちて着いてください。例え敵が何人増えようとも貴女を守ります」

「主よ。落ちて着いてください。敵の出方がわからぬ以上今は観察に傾けるべきです。はい、お任せください。」

ランサーも警戒突然の襲来に警戒する。セイバーにとつてひとまず良い状況だった。ライダー乱入前にランサーの魔槍によつてつけられたこの傷では十全な戦いは出来ない。時間を掛ければ掛けるほど不利になってしまう。このままでは敗北の危険があったがライダーの乱入によつてひとまずランサーと距離を置ける。

ライダー以外が沈黙していた所沈黙の原因のライダーが口を開く。

「ガハハハ！どうだ、余の同胞となり共に聖杯の栄光を分かち合わぬか？」

その場のライダー以外全員が呆れたように思えた。聖杯戦争のルールを無視した無茶苦茶な提言。セイバーも当然ランサーも受け入れられるはずもない。

「その提案には承諾しかねる。俺が聖杯を捧げるのは今生にて誓いを交わした新たなる

君主ただ一人。断じて貴様ではないぞ、ライダー！」

「私もブリテン国を預かった王としていかな大王の臣下に下るこは出来ない」

「ふくむ。けんもほろろだのう。それにしてもブリテン国の騎士王がこんな小娘とはのう！」

「その小娘の剣、受けてみるか？」

その言葉はセイバーの琴線に触れた。生前から気にしていることを面と向かって言われては決して気持ちの良いものではない。

「こりゃあ怒らせてしまったか？ いやすまんすまん。セイバーとランサー、お主らの剣劇は実に見事であった。このイスカンダルもつい惹かれてしまったぞ。称賛しよう！ ……しかしだ。おいこらあ！ 闇に紛れて覗き見しておる連中よ！ 聖杯に招かれし英霊は、今此処に集うがいい！ なおも顔見せを怖じるような臆病者は、征服王イスカンダルの侮蔑を免れぬものとしれい！」

ライダーの言葉にセイバーはもしや自らの切嗣の策が見破られているのではと警戒するがライダーは英霊に興味がるようだ。現にライダーは離れた場所からの狙撃は考えてもいなかった。

きけい

きけい

「……………いきけい……………」

セイバーたちが集う埠頭に誰かの声が響いた。

「な……………何？ この声は……………」

気のせいでは無いことがアイリスフィールの怯えによって証明される。

直後轟音と共にセイバー達の中央に何者かが降り立った。

「聞けい」

何者かが威圧を持って語る。

「聞けえい、愚民ども。わしの名は鷲巢巖。貴様らの支配者じゃ……………」

空気が凍る。

「貴様らガキ共に告げる。これは宣戦布告であり最後通牒じゃ……………」

「この戦争はわしが勝つ。貴様らこの先誰につくか……………心して決めいい!!」

沈黙が訪れる。ライダーの時のような呆れではない。セイバーもランサーもそれまで陽気だったライダーまでも笑みを消し、皆押し黙った。語った内容はライダーと似ているが決定的に違うのはこの老人はセイバーたちが欲しいわけではない。ただ己の下

にセイバーたちが位置していることが当然のように語っている。理屈ではない……傲慢。この謎の老人から発せられる狂気の風格が単なる妄言ではないのだとをこの場にいる全員が無根拠ながら感じた。

セイバーはもう一つ分かった……と言うよりも感じた。……この老人は碌な人間ではない。少なくともセイバーは好きになれない人種。一生友にはなれない。

「貴様何者だ！ サージュアントのようだが……」

「言つたはずじゃ優男よ。鷲巢巖。此の場に倣うならバーサーカーじゃ」

「なんと！ バーサーカーとな？ これは面白い！ 理性ある狂戦士とは実に興味深い」

セイバーはこの状況を考えていた。現状最も不利なのは手負いの自分だと。

もしこの場で手負いの自分が一斉に襲われたらと剣の力を解放しても捌ききれるかどうか分からない。最悪……自分は敗れ座に帰りアイリスフィールは死ぬ。破綻、敗走、敗北。脳裏にあの日あの丘での無念が呼び起こる。

（駄目だ！ 私には使命がある。なんとしてもここを切り抜けなければ……）

セイバーは人知れず決意を固めた。その時、老人の後ろから人が飛び出した。

「バクサクカク?! なに考えてやがりますかあ！ いきなりこんな修羅場に飛び込んでしかも真名もクラスも明かすなんて馬鹿なんで……アイタツ!!」

「いちいち煩いわ！ お主は黙って見ておれい。」

少年……少年が現れた。話を聞く限り彼はあの老人……バーサーカーのマスターなのであろう。

セイバーは気が重くなった。状況によつては彼を斬らなければならない。セイバーは大義の為ならばどんなことをしてでも聖杯を勝ち取らなければならない。だがその為に幼い命を犠牲にすることに。

「余が一瞬気圧されるとはただならぬ男よ。お主！ 余の臣下にならぬか？」

またも空気の読まぬライダーの言葉。だが今は少しでも謎のバーサーカーについて情報が知りたいところでありその呆れる行動は実際は皆がありがたかった。

「わしを部下にするだと？ 冗談も大概にせい。わしは使う側、それ以外は使われる側じゃ！ わしは王！ 帝王なのだ！ 王は常に世界の頂点に君臨する存在であり誰の下にもつかぬ!!」

「はっはっはっ！ 我が強いのに益々気に入った。余の好敵手ダレイオス三世もきつとお主のように断るのだろうか」

「戯け。そんなどっかの無能と一緒にするな」

その時場に謎の声が響いた。

「なぜそこに君がいる？ ウエイバー・ベルベット君」

「またも突然、謎の声が辺りに響き渡る。」

「ヒッ……」

老人のマスターが悲鳴を上げ老人の背後に隠れた。

「成程。バーサーカーかね？ 君のサーヴァントは？ なぜ君のような未熟な魔術師がこの聖杯戦争に参加したのかは知らないし知る必要もない。ま、おおかた君ご自慢のあの愚かな議論にも値しない世迷い言を証明するためだろうが……しかしどうなのかね？ そのサーヴァントの屑のようなステータスは？ 口は聞けるがとてもマトモではない。君も一応私の教え子の一人だが全く恥ずかしい限りだよ。さつさとサーヴァントを自害させて時計塔に帰らたまえ。私が凱旋した後、私に一瞬でも逆らったことは不問にしよう。破格の待遇だと思うが？」

ライダーとバーサーカーのマスターは知り合いのようだ。しかしあまり良好とはいえない関係のようなのは見る限りだが。

するとライダーが興を削がれたように不機嫌になり己のマスターに語る。

「マスターよ、あまり若いやつをネチネチ誇るものではないぞ。余の時代もそういった者は優秀でもいづれ恨みを買って失脚するか死んでしまった」

「黙れライダー。この現状の責任の大半はお前にあることを忘れるな。そしてそんな愚かの極みをわざわざ許可したやつた私にもな」



「やれやれ。余のマスターはあまりこういつたことを好まんだ。セイバー、お主のマスターは美人で気立てがよさそうだのう。どうかな？ お主もわしの下に来んか？」

「生憎だけど私には夫も娘もいるわ」

「なんと！ かあゝゝつ。先を越されたか。幸せ者だのう、お主の夫は。」

セイバーやはりライダーのことが好きになれなかった。

「ぼ……僕は！」

突如、意を決したように少年がライダーのマスターに向けて叫ぶ。

「僕はもう自分でチャンスは捨てないって決めたんだ！ 先生……いやツケイネス・エルメロイ・アーチボルト！ 僕は貴方を倒して貴方より僕が優秀だって世界中に知らしめてやる！ そっちこそ、今ここで僕に負けを認めるなら僕が時計塔に凱旋した時に悪いようにはしないぞ!!」

「貴様ツ……いいだろうウェイバー。ならば私も容赦はしない。魔術師として相手をしてやろう。但し、四肢の二・三本は失う覚悟をしたまえ」

「……そ、そんな脅しはもう怖くない。ここは教室じゃない！ 戦場だ！ 貴方こそ、自

分の命を賭ける覚悟が無いならとつとと帰つて自分のテリトリーで思う存分バカな奴等に教鞭を振つてろ！」

「うむ。よく言つた小僧」

「おお、お主中々胆力があるのう！」

なぜかバーサーカーとライダーが同時に称賛した。

「ライダー、貴様どちらの味方だ……っ」

「ガハハハッ！ そう言うな。余は勇気ある若者を称賛したまでのこと。おのが意思で戦場の最前線まで来る者はそうは居ない。どんな歴戦の戦士でも足が竦むものよ。それをこの少年は敵である我ら、総大将たるマスターに啖呵まで切るとはそれだけで見どころ大ありだ！」

ライダーは大口を開け笑いながら言つた。

「どうだウェイバーとやら？ お主も余の……」

「生憎じゃが勝手な引き抜きは許さん。こんなちんまい小僧でもわしのマスターなのだから」

「むう、なかなか上手かいかな」

「それで茶番は終わったか？ 雑種共」

またもまたも突如として現れたのは全身黄金の鎧に包まれたサーヴァント。

セイバーは剣を持つ握りを強める。状況が把握しづらかった。ライダーの乱入によつてひとまずランサーと距離を置いたのは利点だった。ランサーの魔槍によつてつけられたこの傷では十全な戦いはできない。時間をかければかけるほど不利になっていく。だがその後のこの状況にまったく言つていいほど対応が出来ていなかった。

ライダーだけでもややこしいがバーサーカーと黄金のサーヴァントの来襲でもはや訳が分からぬ。

「なんじゃ？ あの金ぴかは？」

「あ、あいつだ！ アサシンを一瞬で倒したサーヴァントだ！」

「我を差し置き王を称する不埒者が一夜に三匹も湧くとはな……」

「難癖付けられてもなあ。イスカンドルたる余が王と名乗つて何が悪いというのだ？」

「新の英雄はこの我ただ一人。有象無象の雑種が王と名乗るなど片腹痛いわい！」

セイバー嫌な予感がしいつでも動けるように脚に力を込めた。

黄金のサーヴァントが鷲巢に目を向けた。

「なるほど。何が出るのか些か興味があつたが己の分を弁えぬ狂犬であつたか。王を名乗り更にはこの我を支配するなど……そんなことは神にも出来ぬこと。下らぬ。我を侮辱した罪、万死に値する。その命をもつて償うがよい！」

突如アーチャーが激昂し後方に無数の光が現れる。そこから何かが現れる。武器だ。刀・剣・斧・槍などが光から現れバーサーカーに向けられる。

「その無様なマスターも同罪である。精々散り様で我を興じさせよ、狂犬」

無数の武器が放たれ一瞬でバーサーカーが立っていた地が爆発し粉塵が舞う。誰もが直後の凄惨な光景を想像した。

「フツ、悲鳴も上げずか。つくづく下らん。いつの世も道理を弁えぬ狂犬は怒りを通り越し哀れであるな」

「バーサーカーが……やられた？」

アイリスフィールが驚嘆する。それも当然だ。爆発点からあのバーサーカーが逃げた動きはなかつた……あのクラスの攻撃を仮に防御したとなれば何かしらの魔力的兆候があるはずだ。だがこの場にいる誰もがそんなものは感じなければ見てもいい。

しかし、

「やれやれ。確かに無様じゃ。この程度で気絶するとは……なさけない。」

「なに？」

アーチャーの眉間が寄る。

その場の全員が驚いた。あの攻撃でマスターともに驚巢はほぼ無傷であった。

「おい金ピカ。いきなり攻撃とは礼儀を知らんやつじゃのう。大体なんじゃその格好は、全身金ピカでデラデラしてて見てるだけで煩いわ。これだから最近のガキは腹が立つのじゃ！」

明らかにプライドが高いアーチャーに対しておおよそ言っではいけない言葉。見下しの暴言。

「狂犬が！ 我を侮蔑し挙げ句見下すとは!! その血肉一つたりともこの世に残ると思うな！」

後方の光が更に巨大化する。そして先程とは比べられぬほどの宝具がバーサーカーに放たれた。

セイバーが驚愕している間に刀剣がバーサーカーに迫る。このまま行けば直撃だ。回避せねば死は避けられない弾幕。セイバーは思った。余程の武芸者でもない限り回

避は不可能だ。あのバーサーカーがその可能性もあるが後ろで気絶しているマスターを庇って更に無事回避するのは難しい。恐らく、セイバーが知る限りはランスロット卿でもない限りは深傷を負うか死ぬかのどちらかであった。

「きやあ！」

衝撃にアイリスフィールが悲鳴を上げる。

「セイバー！一旦離脱しましょう！バーサーカーがやられたら次は私達かも知れないわ！」

アイリスフィールの提案は最もだ。だがセイバーは何故かあの老人が死んだとは思えなかった。

「フツ、これで終わりだ。塵になっ……」

「最近の若者はキレやすいと鈴木が言っていたがマジじゃのう。わしが若い頃より荒んでおるわ」

「バ、バーサーカ……それはちよつと違うって……おえ」

「なんじゃようやく起きたか」

爆煙が晴れると其処にはバーサーカーが立っていた。傷一つなく。辺りはコンクリートやアスファルトが四散し爆心地の様子だが彼が立っている場所だけは無事だっ

た。

「ぬう。アーチャーの射ち損ないではないな。あやつの宝具かスキルだろうのう。マスターよ、何か分かるか？」

「主よ。どうか、どうか落ち着いてください。いま動くのは我らにとつて益にはなりません。いましばらくご辛抱を」

それぞれマスターと相談をする陣営。アイリスフィールも困惑している。当然だ。アーチャーの強烈な弾幕を回避も防御もせず。しかしあれが偶然とも思えない。少なくともセイバーには出来ない。

「しかしサーヴァントになり体力も付いたがこの力も昔以上に冴え渡つておる。これ程とはわしも驚きじゃがな」

「狂犬……余程死にたいらしいな。よかろう、この場を貴様の処刑場に……時臣？……大きく出たな……いいだろう。ここはお前に免じて引いてやろう」

そう言うとうと黄金のサーヴァントは背後に展開していた宝具を収めた。しかしその顔には未だバーサーカーに対する殺意が現れている。

「運の良い奴めが……貴様の幸運に感謝しろ。だが忘れるな狂犬。貴様の死は変わらん。我が直々に駆除してやろう。それまで精々怯えているがよい。他の雑種共も有象

無象を間引いておけよ。我に挑戦しうる英霊は一人でよい」

そう言放ち黄金のサーヴァントは霊体化して消えた。

「主よ。申し訳ありません。はい。アーチャーは消えました。この叱責は後ほど。セイバー、我らの戦いはひとまず持ち越した。だがいざれ決着をつけるぞ。さらばだ!」

「ふむふむ。まあ最初の集いとしては上出来というもの。今日は無理だったが余はいつでもお主らを歓迎しているぞ!ガハハハ!」

「何を考えているライダー。今こそセイバーを倒す好機であろう。」

「戦場の花は愛でるものだぞマスター。それに無理に余を戦わせ早速サーヴァントとの関係が破綻したと奥方が知ればどうなるかのう?」

「ぐうっ……良いだろう。私に感謝するのだな。ライダー、撤退しろ」

ライダー続いてランサーも撤退した。

まるで嵐のようだった。傷の痛みも忘れセイバーはいま起きた数々の信じ難い出来事を、受け止めていた。

「なんじゃ、皆帰ってしもうた。お前だけか? 残りは」

「くっ……手負いとはいえ易々とやれると思うな……私には救わねばならぬものが



……」

「帰るぞ、小僧」

「な!?! までっ!」

「なんじゃ。わしは帰って寝る」

「ふざけるな! サークヴァントなら戦え! 私に情けを掛ける気ですか!」

「お主のことなど知るか! わしは帰る! 今日はまだ終わり! 終了!」

セイバーは頭に血が上るのがはつきりと分かった。

「セ、セイバー……」

「止めないでくださいアイリスフィール! どのみち戦わねばならない関係です!

バーサーカーを倒しこの傷の失態を……」

自分の行いが不合理なのはセイバー自身のはつきりと分かっていた。だが一別もされずに見逃されるのは騎士としての矜持が許さない、この時はその怒りが体を動かしている。とセイバーは思っていた。

バーサーカーに切りかかろうと構えたその時、脳内に久し振りに聞く声が響く。

(セイバー、退くんのだ)

(切嗣? 何故ですか!?)

(もう一度言う。退くんのだ)

「……………くつ……………分かりました。貴方に、従います」

「マスターの女と話をついたようじゃな。わしは帰る。ちゃんと毎日話をする契約じゃからな。帰るぞ小僧。」

「僕ら、いったい何しに来たんだよ……………無駄に敵意を振り撒いたんじゃ……………」  
「相変わらず庶民の発想じゃのう。シャンとせい」

バーサーカーはマスターを抱え遠ざかる。後に残ったのは敵のいない戦場で剣を構える間抜けな女。

「申し訳ありません。戦果を挙げられず。傷までも……………」

「いいのよセイバー。貴女が無事なら……………でもどうしたの？ さっきバーサーカーを相手にした貴女はおかしかったわ。あんなに取り乱して……………いつもの冷静な貴女じゃないわ」

「騎士として、敵に見逃されることは恥辱でしたので……………」

セイバーの答えにアイリスフィールは一樣の納得を得て安心したように頷いた。

「そう、ならいいの。次は勝つ。これでいいと思うわ。私達も帰りましょう」

セイバーはアイリスフィールに対する罪悪感を感じていた。セイバーの説明は事実であるが真実ではない。矜持を気づけられたことは本当だがそれが怒りの原因ではなかった。どうして自分はあんなにあのバーサーカーに怒ったのか、それが分からなかった。確かに鷲巢は恐らくセイバーが嫌う人種だろう。人を見下し傲慢で不遜だ。相容れない存在、理解は出来ても共感は出来ない。だがそれだけならばあの黄金のサーヴァントもそうだ。しかし黄金のサーヴァントにはあそこまでの激情は抱かなかつた。なら何故自分はそのバーサーカーにあそこまで我を忘れたのか……それがセイバーにとって謎であつた。

セイバーにすれば思えばこの時からだった。鷲巢巖。自らの全てを壊した男との最初の出会いは……。

鷺巣たちは家に帰り次の日を迎えた。今朝は帰りが遅くなったことを夫妻に問い詰められたがバーサーカーが上手いこと言いくるめた。

「あれじゃよ。小僧は結局のところ小僧。夜の街に繰り出したい年頃じゃ。察してやれ。お主らには言いづらかろうよ」

「おおそうだったか。ウェイバーも背伸びしたい年頃か」

「案ずるな。わしが監督してやろう」

「鷺巣さんなら安心だ。なあマーサ」

「ええ。鷺巣さんなら大丈夫だわ。それにしてウェイバーちゃんもまだまだ子供っぽいところがあるのねえ」

「説明しておいたぞ。」

「助かったよ。バーサーカー」

どんな説明をしたのかはウェイバーは知らなかった。

「それで、これからどうするんだ？」

「慌てるな、まずは情報収集じゃ。何事も相手を知ることから始まる。何処かの知識人もそんなことを言っておった」

「情報か……一応使い魔は放つていいけど……」

「小僧の未熟な使い魔ではサーヴァントはおろかマスターにもバレるわい。あの瘡に障るケイネスとかいう奴なら一発で見抜かれるのが落ちじゃ」

「ううっ…確かにそうかもしれないけど他に方法がないだろ！ 僕には手下なんかいないし冬木に協力者もない。戦争なんだからマスターの僕が直接無暗に出歩くわけにもいかないし……」

「当り前じゃ！ そんなことをしたら今日にもお主は死ぬぞ。ここはわしが行こう」

「え!? バーサーカーが？」

「当然じゃろう。わしはお主よりは強い。そもそもわしに何かあるはずもない。小僧はここで朗報を待っておれ。」

ウエイバーは意外だった。このサーヴァントはてつきり全てのことを他人に任せる

ようなやつだと思っていたからまさか自分から動くなど露程にも想像していなかった。

「フンッ！」

「アイテッ！」

そう考えているとまたも僕の脳天をバーサーカーの杖が直撃する。

「ウぐぐぐ……そ、それでバーサーカーが出向くって言ったって当てはあるのか？ いくらサーヴァントでも気配遮断スキルは持つてないし他の陣営だってそう簡単に見つかるような拠点には居ないだろうし」

「案ずるな！ 当ては……ある。昔の知り合いに会ってくる」

「知り合い？」

「生きていれば100は超えておるだろうがまああの男ならば関係ないじやろう。まさかわしが先に死ぬとはなッ！」

バーサーカーが何を話しているのかは分からないがきつと悪いことなのだろう。気持ち悪いぐらいに怒ったり笑っている。

「ククククッ！ 待つておれ臍硯。久しぶりに茶でも飲ませてもらうか……！」

## 鷺巢周辺

わしずいわお  
鷺巢巖

昭和の妖怪。政財界のフィクサー。日本の闇の帝王。様々な呼び名があるこの男について記したい。

鷺巢は1912年、旧帝国大学を卒業し22歳の若さで現在の警察に就職する。そしてその後瞬く間にその抜け目の無さと狡猾さで頭角を現し上司同僚後輩を圧倒し出世街道を邁進する。ここまでならまさに成功者、輝かしきエリート半生だが鷺巢巖の異様さはここから始まる。

50歳で警視長クラスにまで昇りつめた二年後、1942年突如警察を退職。警視総監に昇進するのも最早時間の問題とまで持て囃された男の早すぎる引退に当時は皆不思議だったが、後々考えればその理由は単純明快にして効果的。

鷺巢は予見した。この日本の滅びを……！

1942年は当時戦後真っ只中ながらも日本中が大本営による戦勝報告に酔いしれ誰もが日本の勝利を、連合国の敗北を信じて疑わなかった。だが……

鷺巢は一早く見限った。

その年の1942年6月

後にミッドウエー海戦と名付けられた日米大戦の分水嶺。その大敗北によって鷺巢はアツサリと見限った。スパツと。

公的機関から離れ一民間人となり戦後、必ず起ころう戦犯追及。特別高等警察時代の悪行の数々、市民への言論弾圧、その責任から自分だけは免れるように……。

この動きは戦況が悪化するたびに政治家や軍人、警察・司法などあらゆる日本の権力者達の間で日増しに増加していったが鷺巢はただ一人、誰にも分からぬ時期にそつと、ひっそりと常人の計りを越える神がかり的な卓越した先見性をもって実行した。

そして何よりも、仮に鷺巢と同じ時期に日本の敗戦を予見した者が他に居たとして果



たして鷺巣と同じ決断が出来ただろうか。一度人生の大部分を消費して積み上げた人生の結晶でもある地位や名誉を捨て去ることが出来るか？ 不可能である。常人は例え己の決断が正しいと思っても目の前の利益や損失のため大抵は決断を保留する。だが歴史を見ればそうした権力者たちがどうなったかは明らかである。

そして市井の人間となった後も鷺巣はその能力をいかに発揮した。

戦後、鷺巣はまだ世界でも稀な企業コンサルタント会社を起業した。企業が他企業に経営方針を指南してもらい金を払う。そんな発想は当時鷺巣以外誰も持つてはいなかった時代に誰もが「何を馬鹿げたことを」と鷺巣を白い目で見た。しかし……

鷺巣が起業した経営コンサルタント会社「共生」はあたった。

共生がコンサルティングした企業は皆躍進した。それも通常、コンサルティングと言っても売り上げの1割も上昇すれば大成功であるはずが鷺巣が入れ知恵した会社は前年比の2割から3割という考えられない業績アップを成し遂げたのである。だがこれには裏がある。

鷺巣は警察時代または様々な企業と接しているうちに入手した政治家や官僚の表に出ていない不祥事の数々を使いこれから何処が開発されるか、どんな法律が施行される

か或いは解除されるかなどの企業家にとって値千金の情報を権力者達から時に強請り、時に懐柔し、インサイダー取引をして利益を上げていたのだ。

しかし通常こういった輩はどこにもどんな時代にもいるブローカーという奴であり、金は手に入るがいつ検挙されてもおかしくない日陰者である。だが鷺巢がそこらの企業ゴロと違う所はコンサルタントをした企業の顧問に就任し非合法の沼から抜け出し自らの立場を合法にしたことだ。これによつて鷺巢は毎年コンサルタントした企業からその収益の上前を堂々と撥ね続けた。

そのほかにも鷺巢は当時すでに用済みとされた軍需工場や鉄くずを大量に買い取つた。元の持ち主たちは処分に困つた不良債権を買つてくれるということと二束三文で鷺巢に売りさばいたが後にそのことを後悔することとなった。1950年 朝鮮戦争勃発による空前の軍需産業の復古と鉄の価格高騰により鷺巢は莫大に利益を出した。一部では鉄屑集めのための違法な海賊行為を指揮していたと言う情報もあるが定かではない。

更には戦後日本に多く出回つたとされる偽札にも関与しているとされ、その金を使い様々な働きかけをしたとされている。

同時に共生は当時誰も見向きもしなかつた新興企業の経営権を違法・合法問わずに尋常なスピードで手に入れ、己の傘下に加えた。そしてその後それらの企業は日本の復興

と発展の基盤となるインフラ整備技術やトンネル掘削技術等を開発し、またも驚巢に莫大な利益を与えた。

そしてその有り余る強大な資金と影響力を持つて政界にも驚巢はその魔の手を伸ばした。

驚巢は当時まだ一介の中堅議員に過ぎなかった田中角栄の才能にいち早く目を付け、資金面での強力なバックアップを行った。その驚巢の支援によって角栄は持ち前のカリスマで民衆の心を掴み、驚巢の金で政治家の心を掴んで離さなかった。それにより角栄は当時地方と都心の格差の原因の一つでもあった人口・経済格差を打開するために、後、にその功罪の意見が別れる日本列島改造論を掲げた。角栄は日本全国の交通網、インフラを整えることによつて日本の物流や人の流れを活発にし、日本経済の発展に寄与したが、その中に驚巢の意志が加わっていたことは間違いないだろう。

このことから驚巢は戦後の日本の状況を巧みに利用し利益を出した怪物と言えるが、彼が日本に与えた功績も大きい。

日本が経済復興するに辺り、その基盤を支えた労働力……人口の急激な増加に対応するための建設業の推進は急務であった。しかし大口の建設受注のためには入札を勝ち取るために多額の予算を計上する必要があった。それは平時の現代においては当然の措置だが、まだ戦後の傷が癒えていない当時の日本では入札は建設業者を疲弊させ復

興の足枷となつていた。

そこで鷺巢は前述の企業コンサルタントによるインサイダーや談合によつて日本の建築産業を不毛な価格競争で疲弊させることなく安定して利益と公益を生み出した。多くの建設業者もこれに賛同し巨大な談合システムが生まれたと言われている。これは筆者も戦後と言うどん底から這い上がる途上であつた日本にとつては必要悪だと認めざるをえない。

当時世界最強の国によつて徹底的に国土を破壊しつくされた極東の敗戦国が戦後の奇跡の経済復興を成し遂げた破滅と復活の時代。それまでの権威・権力が崩れ去り誰も知りもしなかつた個人や企業が大宰相や世界的大企業に躍進した疾風怒濤の時代。

鷺巢は駆け抜けた……欲望の海を。

敗戦という絶望的状况……誰もがうなだれ明日への希望を持てなかつた時代に鷺巢は決して諦めず、決して屈せず勝利し続けた。

そして積み上げた。金を。無限に等しき圧倒的金の城を己の手で築き上げ日本を影から操るフィクサーとなつた。

晩年の鷺巢は当時世間を騒がせた多くの若者が血液を抜かれ殺されるという吸血殺人の容疑者として一部マスコミや警察関係者の中で疑われていた。そのことが鷺巢の死に関与しているかは謎であるが筆者はさらなる調査をしようと思える。

最後に、驚巢巖は当然ながら死亡したとされているが彼を知っている関係者の多くは口々に「とても想像できない」と語っているあたり、彼の悪魔的なカリスマをうかがわせる。

「以上がバーサーカーに関する現在収集できる情報の限りです」

「そうか……ありがとうマイヤ。引き続き頼む。」

「分かりました」

ここはセイバー陣営の拠点であるアインツベルン城、そのブリーフィングルームにセイバー含め全員が揃いマイヤから埠頭で出会ったバーサーカーの報告を聞いていた。

「それで……つまりあのバーサーカー……驚巢……巖？ ……は危険なの切嗣？」

「情報からして単純な戦闘力で考えればどうと言う事はないだろうさ。恐らくキャスター的な立回りを得意として正面からの力押しを苦手とするタイプだ」

「ですがアーチャーの宝具を凌いだ事實は注意すべきだと考えます切嗣」

すかさずセイバーが忠告をする。しかし衛宮切嗣はセイバーを一別することもなく話を続ける。

「注意すべきなのは奴の宝具とスキルだろう。戦法もその二つをメインに挑んでくるはずだ」

「大丈夫なの？」

「勿論。幸いバーサーカーは何の神秘も持たない近現代の英霊……おまけに情報も時間を掛ければ精度は高まるはずだ。それにマスターもバーサーカーを制御しきれていないようだったから潰け込める部分は幾らでもある。根城さえ突き止めれば直ぐに作戦に取りかかろう」

「分かりました。」

「さて、セイバー達に接触したキャスターも気掛かりだが……とは言えまずはライダーだ。ケイネス・エルメロイ・アーチボルトの根城が確認できた。例の作戦で行く」

「切嗣っ！ 私はあの作戦は反対です！ あのような手段では……」

「準備が整い次第出発する」

セイバーの意見を切嗣はにべもなく切り捨てる。そこにある感情は読み取れない。

「……くっ！」

セイバーは歯噛みしていた。切嗣はセイバーを徹底的に無視をしている。これではマスターとサーヴァントと信頼関係など築ける訳がない。切嗣はセイバーのような英霊を切嗣は嫌悪している。世界平和を望む切嗣からすれば日々戦いに明け暮れていたセイバーは善であれ悪であれ侮蔑の対象であった。しかしそれにセイバーは怒っていた。……これではまるでセイバーの人格など不必要だと言っている様で理不尽に感じている。

「……ごめんなさいセイバー。切嗣のことが気に障ったなら私が代わりに謝るからどうか責めないであげて頂戴。あの人はこの戦争のために全てを……」

「分かっています。アイリスフィール。気遣い、感謝します」

皮肉なことに切嗣と希薄な関係の分、アイリスフィールとの関係は益々強まっているとセイバーは感じている。セイバーは最初アイリスフィールがホムンクルスだと知り適正なコミュニケーションが取れるのか不安だったがそれは直ぐ様杞憂に終わった。アイリスフィールは造られた人間とは思えないほど聡明でそれでいて人間味に溢れていた。そして愛する娘と夫の為その身を捧げサーヴァントであるセイバーを今のよう

に勞つてくれる。不義と思いつつもセイバーはマスターが本当にアイリスフィールだったらと想像してしまっていた。アイリスフィールの存在は確実にセイバーの心を癒している。自身でもおかしいと思いつつも在りし日のギネビアのように感じていた。

「アイリスフィール……私は貴女に出会えて幸せです。本当に感謝します。必ずや聖杯を貴女に捧げましょう」

「ありがとうセイバー。今はまだ無理かもしれないけど貴女の純真な思いはきつと切嗣に届くわ。私も出来る限りの努力をするわ」

アイリスフィールが自分のの理解者になつてくれたと思つているセイバーは、ならば騎士としてその恩に報いようと剣を握りしめた。

「ところでセイバー。私は日本の歴史に詳しくないからバーサーカーについて説明を聞いてもよくわからなかったの。セイバー達サーヴァントは座で英霊についてある程度学べるのよね？」

「はい、その通りですアイリスフィール。ランサーやライダーの正体がデイルムツド・オデイナや征服王イスカンダルでありどういった人生を歩んだか、私はそれなりに学習しています」



「なら、セイバーはバーサーカーのことも……」

「申し訳ありません……学習といっても全世界の余多いる英霊を完璧に記憶しているわけではないのです。ですのでバーサーカーについては正直私も詳しくはありません」

「そう……残念ね。」

「力に成れずすみません。アイリスフィール」

私が謝罪の意を伝えるとアイリスフィールは慌てて訂正する。

「ごめんなさいっ、そういう意味じゃないの……」

「お気持ちは有り難く受けとります。アイリスフィール。大丈夫です。次こそは戦果を上げます」

「ありがとうセイバー。でもね……埠頭で出会ったバーサーカーは悪人に見えたけど情報の限りだと日本の復興のために尽力した良い人？ なのかもし……」

「それはありません」

セイバーは即答した。それだけはセイバーの直感が示していた。

このときのセイバーはバーサーカーについて意図的に考えようとはしなかった。バーサーカーの情報を知りどんな人物なのか……その輪郭を知りはじめ、セイバーの心は言い知れないものが溜まっていくのを感じていた。

「ガハハハッ！いや実に素晴らしい眺めよ！これほどの高さから町を見下ろすなど生前は叶わなかったぞ！まさに絶景なり！」

冬木ハイアットホテル

「喧しいぞライダー。それにまだ話の途中だ。今回の埠頭での貴様の不始末……どう取り繕うつもりだ？」

ライダーのマスター、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは不機嫌だった。その原因は目の前の巨漢……征服王イスカンダル。今回の聖杯戦争の為わざわざ最高峰の触媒を取り寄せ召喚したサーヴァントにケイネスはこれまで散々苛つかさせられていた。ステータス面についてはケイネスは満足していた。だがケイネスが問題としていたのはこのライダーの人格だった。

如何に過去、世界を征服しようとした王であろうとも今は己に召喚された使い魔。主である自分に従って当然であると考えていたケイネスにとって、ライダーは想定外の人

物であつた。命令には背き己を主張し続け主である自分に苦言を呈する。

ケイネスの口調は落ち着いていたが言葉の節々から苛立ちを容易に感じ取れた。

「そう怒るなマスターよ。お主もこの景色を観てみる。よい眺めだぞう?」

それに対してライダーはケイネスの心情など素知らぬようにホテルからの夜景を楽しんでいた。

「そんなもの現代人はとつくに見飽きている。それに私はそんなもの下らないものに興味はない。」

「やれやれ……美しいものは例え見飽きても美しいと感じるのが風情と言うものだろうに……それが分かんるとは魔術師と言う生き方は哀れなもんだのう」

「ハッ、そんなものに気を取られるくらいならば新たな術式を思考する方が余程この私の心を満たすと言うものだライダー」

「あら? 私はこの夜景も素敵だと思つたよ? ケイネス」

「おお、奥方どののは分かつてくれるか!」

部屋に現れたケイネスの婚約者ソラウ・ヌアザレ・ソファイアリはケイネスの椅子のにもたれながらライダーに賛同した。

「ソラウ……た、確かにそうだな。戦争が終わつた暁には二人でゆっくりどこか景色の良い所へ旅行など……」

「それも良いけど取り敢えずは今後の方針じゃないかしら？ サークヴァントはキャスター以外確認できたようだけれど騎士王やあのアーチャーの登場は貴方の想定外ではないの？」

「まさか、確かにあのアーチャーは恐らくかなりの神秘を秘めた英霊であろうがそれはライダーも同じこと。ライダーの宝具はソラウに説明しただろう？ 神威の車輪ならばライダーは高機動かつ圧倒的な魔力で戦場を駆け回り眼前の敵を薙ぎ倒すだろう。それに例え倒しきれ無くともライダーには奥の手がある」

「確かにそうだけどもあくまでもライダーへの魔力は私がしてるのよ？ 残念だけど私は無限の魔力は持ってないわよ？」

「そうだとマスターよ。己の夫人を戦いに駆り出すなんて余は快くは思わんぞ？ ましてやこのような他を欺くような真似はな」

「黙れライダー。ソラウ、安心して欲しい。だからこそその私だよ。私を誰だと思ってる？ 九代続くアーチボルト家の後継者であり時計塔の一級講師だよ。如何に御三家であろうともこのケイネス・エルメロイ・アーチボルトを勝ることなどあり得ない。さて、ライダーは最上級の英霊……マスターはこの私。ソラウ、これでもまだ私達の勝利を疑うのかね？」

「ええ、分かったわよケイネス。貴方は天才よ。」

ソラウのなげやりとも思える賛辞にケイネスは満足げに笑みを浮かべワインを傾けた。

(こりゃいかんのう……)

ライダーは心中で陣營の先行きに対して不安を感じた。

(聖杯に呼応して現世に舞い戻ったのは良かったが己のマスターがこんな奴とは余も運が無い。能力が有るのは認めよう。だが如何せん慢心が過ぎる。それに聞くところによればこの男は実践経験が殆ど無いと言う。そんな頭でつかちな奴が思い描く尋常な勝負が果たしてこの戦いに本当に有るのか余は甚だ疑問である。戦いとは清々しいものだがそれだけではない。凄惨な地獄が常に後ろに張り付いている。余はそれを知っている。だがこの男は……)

「初戦はまずまずと言った所ですね。時臣師」

薄暗い地下工房で男が通信機越しに弟子からの報告を聞いている。

「ああ、そうだ綺礼。令呪を一画失ったのは痛いが大方の勢力確認は出来た。あとはキャスターだが……本当なのかね？ キャスターのマスターが例の無差別殺人の犯人と言うのは？」

「現在確認中ですがまず間違いないかと……」

弟子の父が会話に割って入る

「なんたることだ……神聖な儀式をおぞましい欲望で汚すなど許されることではない」

「…はい。時臣師」

「直ぐに対処が必要ですね」

「ならばこの私が行きましょう。一応なりとも聖杯戦争を脱落した身ですし似たような

経験も有ります。各陣営に通達すればイレギュラーを対処するため私が町に出ても問題ないのでは?」

「君の献身は嬉しいがそれは困る。あくまでも偽装であるアサシンの脱落を万が一にも君の令呪を他の陣営に知られたくはない」

「仰有ることは理解できます。しかしそれでは神秘の秘匿や犠牲者が……」

「落ち着きなさい綺礼。申し訳ありません時臣殿」

「いえ、さすがは聖職者であり璃正殿の御子息です。それに彼の提案の中の各陣営に通達する……これは使えます璃正殿」

「ん? ……なるほど。確かに使えますな。急ぎ準備をいたします。綺礼、手伝つてくれ」

「どう言うことですか?」

「なに、直ぐに分かるさ息子よ」

ギルガメツシユはすこぶる機嫌が悪かった。一応なりとも臣下の礼をとる時臣の進言を聞き入れた事ではない。原因はあのバーサーカーである。ギルガメツシユは見抜いていた。あのバーサーカーの本質を。

(あり得ん……あのような男がいるはずがない)

しかし自分で導いた答えにギルガメッシュは納得できなかった。

「どういふつもりだ!」

男、間桐雁夜は激怒していた。必ずやあの悪魔の館から最愛の女性の娘を救うと誓い、いざ戦いとなったその時に肝心要のランサーが全く言うことを聞かなかったからだ。特に時臣のサーヴァントが現れ奴に復讐するチャンスランサーは頑として聞き入れなかった。

「申し訳ありません、主。ですがあの場でアーチャーに特攻するのは下策中の下策です。主の勝利の為ならばこのデルムツド・オディナ、如何なる叱責にも堪える所存です。だからどうか戦いに於いては俺を信用していただきたい。」

「……」



勿論、雁夜自身も自分の指示が何の戦略性も無いことは分かっていた。だがそれでも時臣に一泡吹かせてやりたかった。自分や桜ちゃんがどれだけ苦しんでいるかを時臣に教えてやりたかった。

「……残念だけど信用できないなランサー。令呪を以て命ずる」

「主!?お止めください!」

「俺を裏切ったら……死ね……ッ」

「主? 何故……」

ランサーは、令呪でマスターの言うことをなんでも聞けと命じられると思った。だがそうではなく、裏切れば己が死ぬと言う誓約。

「お前の言うこと全て間違つてるとは悔しいけど思えない。俺は魔術師としてはクズもいいところだ。だからお前に頑張ってもらわないと俺はなにも出来ず死ぬしかない」

「主……」

「だから頼む。俺を裏切らないでくれ……俺を勝たせてくれ……ッ……ランサー……ッ!」

文字通り血を吐きながら雁夜はランサーに懇願した。

「ツツ主！ お任せください!! このデイルムツド・オディナ、全身全霊で戦い抜き、聖杯を主に捧げます！」

デイルムツドは満足していた。再び忠義を全うできる機会に……今度こそ主を裏切る事はしないと、今生の主と己の魂に誓った。

「あれ？ 旦那戻ってたの？ 急にジャンヌがどうのとか言っ出ていったけど。」

「龍之介……今の私は押さえようのない怒りに燃えています。ついに！ ついに！ この現世でジャンヌに出会えたと言うのにツツ！ 神は私とジャンヌを何処までも弄んでいる!!! ああ！ お痛わしい！ 今すぐにこの私めがお救いしなければ!! ジャアアアンヌヌウウ!!!」

「えーと……まあ頑張っつてね。旦那の初恋なら俺も応援するよ」

「初恋などと！ 畏れ多い!! ですが確かに私はあの聖処女と出会い心を奪われました

……かの聖処女と共に並び立ち戦った日々は私に無情の幸福を与えてくれました」

「ほらあ！やっぱり惚れてるって旦那。告白まだなんですよ？ アタックしちゃいなよ

！」

「何と!!?! いや!! しかない!!」

「大丈夫だよ。旦那はお金持ちだし紳士だし意外にスタイルバッチリだよ！そしてなにより趣味が超COOL！ 絶対ジャンヌさんもOKしてくれるよ」

「ムムムム……しかし」

「そうと決まれば最高のシチュエーションを用意しなきゃね旦那♪」

「ふう」

ウェイバーは資料を読んで疲れた目を覆い一息ついた。あれから知り合いに会いに行くと言って出てったバーサーカーの言いつけを守るのは少し癪だったが言ってることは最もだったためこの家で出来ることをしていた。

そもそもウェイバーは自分のサーヴァントについて知っている事が少なすぎていた為、まずは自分のサーヴァントから情報を集めることにした。

バーサーカーと埒頭から帰る途中で、僕は冬木の図書館でバーサーカーについて調べするためにいくつか関連がありそうな書籍を拝借していた。

「なに？わしのことを知らん？ ならあそこの図書館でも行って調べてこい」

と、自分で教えてくれる気はなかった

(めんどくさいやつ……絶対友だちじゃないよな)

図書館では資料を探すのも意外に苦労した。英霊になるくらいだから英国人のウェイバーが知らなくても日本ではそれなりに知名度があると思っていたがこれが中々見つからなかった。無難に日本の歴史コーナーを探しても鷺巢庵の名はどこにも無かった以上時間が掛かってしまった。やつとのこと見つけたのはマスコミの報道出版物や都市伝説や眉唾物のコーナーだった。本当にこんなところにある本に載っているのかと訝しんだが、あった。

バーサーカー、鷺巢庵。

現代に近い英霊だとは推測していたがまさか死んでから100年も経っていないと

はウエイバーは驚いた。……もう少し長生きしていたらひよつとすると生前のバーサーカーに出会えたかもしれないほどのニアミスである。

資料に記載されていることが事実だとしてバーサーカーの人生は普通ではない。極東の島国とはいえ今やウエイバーの自国イギリスを抜き去り世界トップクラスの経済大国である日本の発展の礎を築いた人物なら人類史の偉業と言えなくもなく英霊として呼び出してもおかしくはない。

「あいつ……本当に戦えるサーヴァントなのか？」

確かに凄い人物なのは理解していた。しかし埠頭で出会ったアーサー王やアレキサンダー大王やあの黄金のアーチャーにバーサーカーが勝てるのか……ウエイバーにはどうしても不安だった。

だが……それがどうした。元々ウエイバーは何の計画性もない博奕で始めた聖杯戦争。はなっから優位なサーヴァントを召喚出来るとは思っていなかった。其処は仕方ないと割り切るしかない。割り切ったあとに自分の出来ることをする。それに埠頭でアーチャーから放たれた攻撃をバーサーカーは防いだ。何故……どうやったかはよくわからない。バーサーカーに訊けば、

「わしは運が良いのじゃ……カカッ」

と笑うだけで肝心なことは何一つウエイバーは教えてもらえなかった。

ウエイバーは不安だった……だがその不安の原因が最大の頼りなのだから信じるしかない。

「あいつ大丈夫かな……無事に帰ってくればいいけど……ん？」

バーサーカーに思いをはせていたウエイバーの所に教会の監督者から緊急の連絡が入った。